



オオウイキョウ

50編はアサフの詩です。アサフについて次のような箇所があります。ダビデはサウル王家滅亡後、民に推挙され、王となり、宮殿を造り、ガト地方に置いていた神の箱を、エルサレムに運び入れました。運搬にも、到着を祝う式典にも詠唱者としてレビ人が携わりました。アサフを頭とし、次にゼカルヤ、更にエイエル、シエミラモト、エヒエル、マテイトヤ、エリアブ、ベナヤ、オベド・エドム、エイエルを立てた。彼らは琴と堅琴を奏で、アサフはシンバルを鳴らし、祭司ベナヤとヤハジエルは神の契約の箱の前で絶えずラッパを吹いた(歴代上16:5)とあります。ダビデは、主の契約の箱の前にアサフとその兄弟たちを残し、日ごとの定めのおりに絶えずその箱に奉仕させ(歴代上16:37)、と信頼を置き、アサフを王の先見者(預言者)としました。彼らは堅琴、琴、シンバルを奏でながら預言した(歴代上25:1)と、預言、賛美の奉仕を職務としたのです。ソロモンの時代には、その総勢の様子は

レビ人の詠唱者全員、すなわちアサフ、ヘマン、エドトンおよび彼らの子らと兄弟らは、麻布の衣をまといシンバル、堅琴、琴を持ち、百二十人のラッパ奏者の祭司たちと共に祭壇の東側に立っていた(歴代下 5:12)とあります。アサフの詩は、ダビデの詩の数に次ぐ、12編が記されています。

50編は神の裁きについて語ります。神は全世界の地の民に呼びかける「御言葉」を発する神です。神のみ使いは愛と裁きの「火」、自由と行動の「風」ですが、わたしたちの神は来られる／黙してはおられない。御前を火が焼き尽くして行き／御もとは嵐が吹き荒れている(50:3)と、激しい力を帯びていることも告げます。神が来られるのはご自分の民を裁くためであると言います。民とは、「わたしの前に集めよ／わたしの慈しみに生きる者を／いけにえを供えてわたしと契約を結んだ者を。」(50:5)と、①神の慈しみに生きる者、②いけにえを供えた者、③契約を結んだ者であると言います。神はまず、「わたしの民よ、聞け、わたしは語る。イスラエルよ、わたしはお前を告発する。わたしは神、わたしはお前の神(50:7)と、告発の言葉を発します。裁く方は、人ではなく、神である、と民は心に刻みます。

②のいけにえ(捧げ物)に関して、神が求める捧げ物は雄牛や雄山羊ではない、森や山々の獣も鳥もすべて神のものであるから不足はないと言います。何を捧げ物とするべきか。告白を神へのいけにえとしてささげ／いと高き神に満願の献げ物をせよ(50:14)と言います。物ではなく、心からの願い、思い、信仰を捧げよ、と言います。英語訳では「告白」を「感謝」としています。

③の契約に関しては、覚えているふりをして、実行しない、背反している者を糾弾します。十戒を授かりながら、盗み、姦淫、欺き、誹謗中傷などを行う民の邪悪な罪状を神はご存じである。神を忘れる者よ、わきまえよ。さもなくば、わたしはお前を裂く。お前を救える者はいない(50:22)と、契約違反者を裂くと言います。主がアブラハムと契約を結んだ夜、日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた(創世記15:17)との故事を思い出させます。

そして、最後に①の神の慈しみに生きる者である民に、告白をいけにえとしてささげる人は／わたしを栄光に輝かすであろう。道を正す人に／わたしは神の救いを示そう(50:23)と、神の慈しみを思い起こし、「告白」を捧げ、道を正し、「契約を守れ」と勧めます。神の告発は救いのためであると告げます。

アサフは神が御言葉をもって、力強く、熱く、厳しく民を清める方であると伝えるとともに、民が原点に戻り、助けあい、愛し合うものとして、共に生きるようと勧める信仰に立っています。「讚美歌 21」390「主は教会の基となり」を50編の関連讚美歌としています。

参照 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-05-17>